

赤井二人

二人の男がテーブル越しに対峙する。

中央に備えられたのは巨大な鉄板、そしてカセットコンロ。

そう、これぞまさに食の王道、焼肉を執り行うための陣形ではないか。

だが、にも関わらず。

テーブルの脇に置かれているのはネギ。ぶつ切りに、縦切りに、筒切りに。様々な形に切り分けられたネギしかないのだ。

本来焼肉の主役とは肉。肉のために焼肉は行われ、焼肉とは肉を焼くためにあるのだ。

だがそこにあるのはネギ。ネギだ。肉ではない。

肉のない焼肉、否、焼肉ではない。それはネギを焼いて食べるだけの行為。

ただそれだけの行為が食事として成立するのか。ただそれだけの行為が人を満足させることができるのか。

出来る。出来るのだ。

なぜならこのネギはただのネギではない。

そのネギは青森県産の南部太ネギ。

絶滅の危機を乗り越え、現代に蘇った青森の誇り。

多量に含んだ糖分が露となってあふれ出す程に蓄えられたそのネギは、火を通す事によって爆

発的な甘さを發揮するまさに雪国の至宝。

それを塩に胡椒、ポン酢に焼肉のタレなどの強力合同部隊が支援するのだからまさに無敵。故に我二敵ナシ。

だがなにより大事なことはここまでの内容はこれからの嘶になにひとつ関係ないことであろう。

黙々とネギを口に運ぶ二人の男。

ある程度の空腹を満たした一人の男が立ち上り台所に向かう。

「なんか飲むか？」

冷蔵庫を漁りながら髭面の男が問いかける。

「いや、氷くれ。俺のはまだある」

二リットルのペットボトルのお茶を飲み干した角刈りの男はふう、と息をつきながら答える。傍らにはまだ満タンのペットボトルが数本転がっている。

「ほいよつと」

ビールジョッキを手渡した髭面の男が氷の詰まったアイスペールをテーブルの上に置く。

角刈りが素手で氷を掴むとジョッキに放り込み、お茶を注ぐ。

髭面も自分のジョッキに氷を入れ、手にした瓶から緑色の液体を注ぐ。

「そういやお前んとこの後輩、今日はこないの？ あいついつつも飯食うってときにはたかりに来るくせに」

髭面はそう聞きながらジョッキに注がれた緑色の液体を一気に飲み干して、再びネギを焼きだ

す。

「あいつソシヤゲのイベントだって。金ないのにようやるわ」

「そんなんだから金ないんだろ」

「それもそうか」

二人はのんびりとネギを焼きながら、ネギを口に運びゆつくりと味わう。

とりあえずの空腹を満たした今は、余裕を持って味わうためにネギを食べる。

「俺たちってソシヤゲやらないよな。流行ってるのに。なんでだろ」

お茶をぐびぐびと飲みながら角刈りが頭をひねる。

「ファミコン世代ってのはゲーム機以外でゲームやるのがなんか嫌いなもんさ。なんかしらねー

けど」

「そんなもんかねえ」

「さあ？」

角刈りは小皿にポン酢を注ぎ、焼けたネギをくぐらせて口に運ぶ。

ポン酢の酸味がネギの甘さを際立たせる。

「俺たちも三十いったしもういい年だよな」

「なんだよ藪から棒に」

空になったジョッキに緑色の液体を注ぐ髭面をよそに角刈りが話を続ける。

「お前ガキの頃三十越えても変わらずオタク趣味続けてたと思ってた？」

「……お前さんは思ってたの？」

「まあね。あの頃は二十歳過ぎたら今の趣味から足を洗ってゴルフなりなんなりやってるんじや

ないかって思ってたよ。特に理由もなく漠然としたあれだけど」

「現実は何？」

「見ての通りでございます」

今は正午過ぎ。たいした番組もやってはいないだろうと思いつつも角刈りがリモコンに手を伸ばす。

賑やかしくらいにはなるだろうとテレビをつける。

昼の情報番組だ。少し前の傷害事件に関して番組コメンテーターがなにかを言っている。

「でたでたマスクミお得意の犯人はアニメやゲームが好きとかいう誰得情報」

髭面が呆れながらジョッキを一気に飲み干す。

そして三本目を注ぐ。

投げ捨てられたビンがころころと転がり壁にぶつかって止まる。

「多分これだよなあ」

「なにが？」

「いや、なんかこうやって悪い悪いって言われてるとやっぱ大人になったら卒業しなきゃ駄目なんじゃないか？ とか思っちゃうじゃん」

「くっだらねー」

髭面が両腕をあげて後ろに倒れこむ。

角刈りはテレビを消した。

「俺たち悪い大人か？ ちゃんと働いて稼いで税金納めてる立派な大人じゃねーか。そりゃ正義の味方でもなんでもないけど、一体なにが駄目だったの？」

「趣味ちやう？」

「知らねーよ。そんなのオタク趣味のなにが悪いか聞いてもとにかく悪いしか言わなかつた連中に言ってくれー」

「せやな」

角刈りの気のない返事を聞いた髭面がのそりと起き上がる。

そしておもむろにネギを食べだす。が、すぐに手を止める。

箸を置いた髭面が再び台所に向かい、なにかを両手に持って戻ってくる。

そろそろネギも食べ飽きてきたということでも食べようとして持ってきたそれは。

おお、ゴウランガ！ あれは嶽きみ。

厳しい寒暖差によって甘みを成熟させた青森に実る黄金の小判。

その甘みはまるで果物と称される最高級のとうもろこしではないか。

角刈りは嶽きみを受け取ると二つに折って鉄板の上に放り込む。

鉄板の上で焼かれ色がついていくとうもろこしからは香ばしくも甘い匂いが漂う。

トドメにバターと醤油で味を調えられたそれはまさに凶器。美味が人を殺す！

一方の髭面は嶽きみを二つに割るとそのままかじりついた。生だぞ！

だが、それがいい。

熱を加えた甘さとは違う、水分の含まれたみずみずしい甘さ。

野菜なのに果汁がたっぷりと勘違いしてしまうほどのそれはまさに食後のデザートに相応しい。

これぞ東北の神秘。雪国で鍛えられた足腰で農家の人たちがなんかした結果。

角刈りは焼きとうもろこしを、いや、あえてとうもろこしとは呼ぶまい。

焼き嶽きみを味わい満たされた腹をさすりながらふと思う。

こんな日常が。

特になにもない、ただの日常が。

これが幸せなのではないかと。

世間の目は冷たいかもしれない。

それでも今の自分は満たされている。

欲しいものを買って、上手いもの食って、寝る場所にも困らない。

ただほんの少しだけ肩身が狭く、居場所がないだけで。

だがそれを言えば真に自由な人間なんて極僅かだ。

人間なんてみんな心に仮面を被っている。

自制心や道徳心でみんながみんな良い子になれるなんて俺は思っちゃいない。

世界に受け入れてもらうために自分を殺しているだけだ。

まあ、さっきのテレビでやってた奴みたいなのに自由にやられてもそれはそれで困るんだけど。

つまりなにが言いたいかって言うと結局は自分の心の持ちようなのだろう。

俺は幸せでもあり不幸でもある。

大多数の世間様に受け入れられない不幸な人間でもあり、自分の生きたいように生きる幸せな人間でもある。

そんな人生をどう受け取るかは本人次第だろう。

俺はきつとこのまま年を取って、もしかしたら死ぬまで変わらないのかもしれない。

いや多分変わらない。

きつと生きている間になにかをやり遂げることもしなければ、世間に認められることもないだろう。

なにも見所のない、他人から見たら詰まらない人生で幕を閉じる。

それでもきつと、死ぬ間際の俺はそんな人生を後悔したりはしないだろう。

うん。多分。

でもそれは、俺が一人じゃなかったから。

目の前で謎の酒をガバガバ飲んでるこいつがいたからそう思えるんだ。

こいつが俺の事をどう思ってるかなんて分からない。

ロクでもない男って評価で間違いはないだろう。

俺もこいつを立派な聖人とは思わない。

だって流石にガキの頃から三万人のお友達勢とかガチ過ぎるだろ常識的に考えなくても。

それでも、こいつといると楽しいんだ。

こいつだってきつとそうだから俺なんかとつるんでるんだ。

それを友達とっていいのかは分からないけど、それでも一緒にいて楽しいんだ。

なら、それだけでいいんじゃないか。

そんな日常を、俺は愛しているんだ。

——決まった。

今日もまた俺は悩める俺を救ってしまった。

いつも悩んだ俺に手を差し伸べてくれるのは俺。流石は俺。
いやあ、なんか気分がいい。

酒には弱いが、こんな日は一杯やりたくなるな。

そんな気分だ。

というわけでまだまだ酒が残ってる君から一杯頂戴しようじゃないか。

あれだけガバガバ飲んでるんだから大して強い酒でもないだろう。

ということとで念のために可愛らしいウサギのイラストの書かれた小さめのコップをお借りして
さてどうぞ。

がっ………！ 駄目っ………！

この角刈りは失念していた。

目の前の男が酒で稼動するアルコール駆動活動体なのを。

二日酔いの迎え酒にジョニ黒一本あける男だという事を。

角刈りは緑色の液体の注がれたコップを一気に飲み干す。

独特の香草の風味が鼻に通り返ける。

まろやかでありながら深い甘みのあるそれは酒が苦手な自分にも飲みやすい。

しかし、その一杯を飲み干したのは間違いだったと痛感する。

あまりにも濃い。

それはまるでシロップの原液をそのまま注いだような、コンデンスミルクをチューブから直に吸ったような。

いやっていうかこれってなんかで割るんじゃないの？ そのまま飲むものじゃないよね？
しかしそのツツコミを言葉にすることはできない。

急激に頭の中が沸騰したかのような感覚に襲われ視界が一気にぐらつく。

もはや思考することさへかなわずに角刈りは倒れた。

意識は深遠に消えていく。

それはまるで、目覚めぬ眠りのように。

生の嶽きみをむしやむしやと食べながら髭面が男の最期を見届けた。

鉄の戦士は死んだのだ。

空になった鉄板だけがじゅうじゅうと音をたてている。

そんな静寂を破るように玄関から音がする。

インターホンも鳴らさず無遠慮にあがりこんだそれは、どたどたと玄関を抜けここにやってきた。
た。

「きましたきました私がきましたよー」

両手に紙袋を抱えたその女は少し息を切らしている。

腰ほどの長さの黒髪に白のヘアバンド。

顔立ちは美人ではないが、かわいらしいと言ってもいい分類だろう。

童顔ながら知性を感じさせる眼鏡も似合っている。

夏にも関わらず厚着のせいで分かりにくいスタイルもいい。

女性として出ているところも出ている。

というかお前の容姿描写俺たちよりも詳しくない？

「野郎がどうかなんてみんな興味ないっすからね」

紙袋をどさりと下ろして這い回るように鉄板に近づく。

なにがとは言わないが色々台無しである。

「あれー先輩寝ちゃったんすかー。まだまだお昼なのにいいお大尽ですね。あ、もしかして焼肉やってます？ まだ私のぶんあります？ あれネギととうもろこししかない……？ そんなあ。

私朝ちよつと牛井とサンドイッチ食べただけで全然なにも食べてないんすよ喉も渴いたし。酷くないですか？ おなかすいたおなかすいたーなにか飲むものくーだーさーいーよー先輩もてっちゃんさんもお金あるでしょ？ 私ないんですよ知ってますよね？ 貧乏少女、美人薄命。はあ、どうして私ってばこんなにもかわいそうなのかしら涙ちよちよぎれませんか？ ねえてっちゃんてっちゃん聞いてます？」

騒音を発して擦り寄ってきたその煩いクソ女の口に酒瓶をねじ込む。

ハメ造に注いで残ったぶんのシャルトリューズが一気に流れ込んでいく。

喉も渴いていたいたそうだし本人も満足だろう。

顔を真っ赤にしたそいつは奇声をあげながら突っ伏した。

クソ女は生命活動を停止、死んだのだ。

……本当に死んでくれればいいのに。

そして、空になった鉄板だけがじゅうじゅうと音をたてている。

髭面は、こんな日常を愛していた。